

古代中国における名医伝の系譜

坂出 祥伸

森ノ宮医療大学

わが国の名医の伝記集としては、浅田宗伯が嘉永4年（1851）に著わした『皇国名医伝』上下巻が有名であり、主に江戸時代の名医の伝記を集めているが、これを継いだ『皇国名医伝前編』上中下3巻は上古以来の名医の伝記を収録している。竹岡友三『醫家人名辞書』（昭和6年、南江堂京都支店）は資料の出処も示されていて便利である。

翻って、わが国医学の源流をなしている中国ではどのような伝記集があるのか、これまで、あまり検討されていなかったのではなかろうか。私は中医研究院中国医史文献研究所主編『中医人物詞典』（上海辞書出版社、1988）をよく利用しているが、古代から近現代まで6200名の医人が載せられているが、内容は簡単すぎる。最近は、『中医歴代名医碑伝集』（方春陽、人民衛生出版社、2009）が出て、先秦から清末までの名医511人と収録人数は多くないが、記述内容は詳細である。

ところで、このような医家医人の伝記集の編纂が、いつ始まって、どのような経過で今日に至っているのかを紹介してみたい。なお本稿の表題の「古代」とは、清代以前の王朝時代の意である。

まず、最も早く編集されたのは、唐の甘伯宗撰『名医伝』七巻であろう。『新唐書』芸文志丙部医術類に「甘伯宗名医伝七巻」とある。『宋史』芸文志子部医書類に「甘伯宗歴代名医録七巻」として著録されているものと同一書であろう。伏羲より唐までの医家一百二十人の伝記らしいが、残念ながら已に佚している。宋・周守忠『歴代名医蒙求』等に引録があるというが、この書、筆者は未見である。なお、本書の成立時期、甘伯宗の伝とも不詳である。

ついで、南宋・張杲『医説』巻一「三皇歴代名医」に、伏羲氏から唐代宝応年間（762）王冰までの医家116人の短い伝記があり、出処が示されている。これが現存の最も古い医家伝記集であろう。本書の成書時期の詳細は不明であるが、南宋・孝宗淳熙16年（1189）羅頊序がある。

明代には李濂『医史』十巻という医史専門の著作が出ている。春秋時代の医和から元の李杲まで56名に加えて16名を補っている。『四庫全書』子部医家存目に著録されていて、現在では『四庫全書存目』に収められている。李濂は弘治2年（1489）生れ、没年は隆慶3年（1569）ごろと推測される。

明・徐春甫『古今医統大全』巻一「歴世聖賢名医姓氏」にも医家の伝記が収められている。伏羲・神農に始まって明代まで296人の名医の伝記が集められている。『古今医統大全』一百巻は嘉靖35年（1556）に成り、わが国でも翻刻がある。

清朝に入ると康熙中勅撰（陳夢雷・蔣延錫ら編）『古今圖書集成』1万巻、博物彙編芸術典第524巻～537巻の「医部医術名流列伝」一～十四に、上古の資貸季、岐伯から明代まで、約1300人の伝記が収録されている。本書は雍正3年（1725）に完成し雍正6年（1728）刊行。正史の伝記のほか、明代では地方志所載の医人伝をも収録している。『古今圖書集成』は台北・鼎文書局から民国66年（1977）79冊の洋装本が出されている。

最後に、我が国の望月三英（元禄11年・1696～明和6年・1769）に『明医小史』一巻という著述があり、明代医人を評価しているという異色の伝記集であることを注意しておきたい。